

## 第9回（2014年）政治経済学・経済史学会賞

### I. 受賞作品と受賞会員氏名

- (1) 徳永昌弘『20世紀ロシアの開発と環境－「バイカル問題」の政治経済学的分析－』（北海道大学出版会、2013年）
- (2) 高槻泰郎『近世米市場の形成と展開－幕府司法と堂島米会所の発展－』（名古屋大学出版会、2012年）

### II. 授賞理由(1)

本書は統計資料や一次史料を用いつつ、ソ連時代から現在までのロシアで、経済開発と環境問題がどのように展開したのかを明らかにした作品である。これまでの研究が社会主義といった体制規定から演繹された枠組みを用いてソ連時代の環境問題の独自性をとらえようとしていたのに対して、著者は環境問題は体制転換の前後で連続しており、そういった側面はこれまでの体制論的な枠組みでは十分にとらえきれないとして、体制論的枠組みの代わりに近代化の観点に立った問題把握を提唱する。このような問題提起はとかく議論に終始しがちであるが、それを極力避けて豊富なデータを利用しながら具体的に事例を分析した点に本書の特色があるように思われる。

本書は2部から構成されており、第1部では、環境問題に関する研究史と環境政策の推移の検討が行おこなわれた後、それらを踏まえて、シベリアにおける経済開発と環境問題の展開過程が明らかにされる。著者は、地域における産業相互間の関係を深める「面状の工業化」と、そうした相互関係を欠いた「点状の工業化」といった概念を用いて、後者が問題を抱えていたことを指摘している。

第2部で著者は、事例研究の対象として、第2次大戦前から始められたアンガラ川流域開発の一部であるバイカル湖周辺地域を取り上げる。1950年代から60年代にかけて工業化によって飛躍的な発展を遂げていたこの地域では、深刻な環境問題が引き起こされていた。とくに、著者はイルクーツク州に立地した木材化学工業企業であるバイカリスク工場に注目し、一次資料を使いながらそこでの環境問題を明らかにしている。

バイカル湖流域の環境汚染の分析に示される事例研究の分析の綿密さは読者を圧倒してやまない。経済地理学的知見、政治過程分析など広い領域に目を配りながら著者は問題に迫っていく。このように優れた実証研究でありながら、本書が工業化と環境問題という研究領域に対して新しいアプローチを提唱する理論的な作品でもある点を見逃すことはできない。そういった著者の姿勢は、エコロジー近代化をめぐる理論と実証の結合に見ることができる。本書は工業化と環境保全を対立してとらえてきた通説的理解に対する批判として出された工業化と環境保全の両立に関心を払うエコロジー近代化の考えを紹介した上で、ロシアでエコロジー近代化がどこまで達成されたかを測定しようとしている。そして、統計データや環境政策の分析を踏まえて、ペレストロイカ後のエコロジー近代化の試みが結局は挫折に終わったと結論づける。

このように既存研究の入念な批判の上に新しい理論的枠組みを構築しようとする努力し、しかもそれを徹底した実証分析を通じて行おうとするといった形で、学問研究の正統的な方法を貫いたことは、本書の特質として称賛されるべきものであり、本学会の学会賞に十分に値するものとして評価することができる。

本書へのささやかな疑問として、キーとなる概念をもう少し丁寧に説明すべきではなかったという点に触れてみたい。本書はエコロジー近代化といった観点から問題をとらえているが、近代化が単なる工業化以上に何を意味しているのかがはっきりしないのは惜まれる。また、主たる分析の対象であるバイカリスクは周辺地域との関連性をあまり持たない点状の工業化のケースとしてとらえられているようにもみえるが、木材化学工業である当該工場は周辺の林産業との関連を持っていたとも考えられ、その点を著者がどこまで評価するかを知りたいところである。

もとよりこうしたささやかな疑問は丹念に構築された本書の価値をいささかも傷つけるものではない。むしろ著者が本書で提示した分析の枠組みをめぐって議論が起きることを期待してのものである。我々は本書の刊行を喜ぶとともに、今後も著者がこのような大きな作品を世に出されることを希望したい。

## II. 授賞理由(2)

本書は、これまで幕府による市場の統制とみなされてきた18世紀の大阪米市場に対する幕府の関与を、幕府による市場秩序の維持の試みとしてとらえ直すことを提唱する。市場では契約の履行を保証する機構が必要であって、米の取引を巡って株仲間が起こした訴訟を大坂町奉行が取り上げるといったことに示される幕府の司法のあり方はそうした役割を果たしていたのだと本署は主張している。著者はこれまでの多くの先行業績を謙虚に受け止めて、それらを丹念に検討する中で新たな視点を打ち出そうとしている。そうした独自の観点に加えて、論旨の明快さ、叙述の分かりやすさは本書を完成度の高いものにしていく。著者の年齢にしてこのような著述をなしたことに敬意を表したいと思う。

米市場での取引を巡る分析であるが、実物の取引よりもむしろ金融的側面に注目しているのが本書の特徴といえよう。米市場で主に売買されたのは米切手という譲渡可能な証券であり、両替商による金融が重要な役割を果たしていたこともあって、著者は信用不安や大名の財政といった金融財政制度に十分に注意を払っている。

第1部では大阪米市場の制度的側面に光が当てられる。ここでは金融制度に支えられた実物取引、先物取引のメカニズムが明らかにされ、幕府の米価政策が金融を媒介するものへと変化した理由が明らかにされる。

第2部では幕府の米価政策が直接的な買米政策から金融統制政策へと展開していく過程が追跡され、さらには各藩の財政への幕府の関与が問題にされる。ここでは幕府が米切手と蔵米との兌換を司法的に保護したり、米切手の売買を司法的に保護したりすることを通じて、市場での信用不安の発生の抑止が試みられた経緯が解明されるとともに、財政の逼迫した藩への幕府の支援政策が詳しく分析されている。

第3部は情報効率性という概念を用いて米市場の効率性を測定しようとしている。それによって、大阪米市場では資源配分の効率性の必要条件である情報効率性が達成されていたことが明らかとなった。またここでは大阪市場で形成された米価が大津市場に波及することや相場情報の伝達の問題も詳しく検証されている。

こうした研究の基礎となる米市場における米価系列については、著者はこれまで利用されてきた年次、月次のデータのほかに、近江の米穀商の史料から日次のデータを作成して、それを統計分析に用いている。こうした精度の高いデータから着実な結論を出そうとする著者の姿勢は文書史料の取り扱いにも見て取ることができる。

このように、江戸期の市場経済的側面を代表するものとしてこれまでも優れた研究を生み出してきた問題に対して、著者は幕府権力による市場制度の整備という新たな観点を提示することに成功した。綿密な分析に支えられた主張は、極めて説得力のあるものであり、学会賞にふさわしいものといえよう。

このように完成度の高い作品であるが、米の流通にめめされるような市場経済的な側面が米の生産に示されるような非市場経済的な側面とどのように組み合わせられているのか、著者の意見を聞きたいところである。著者が検証した情報効率性は資源配分の効率性の必要条件とされているが、価格の動向は米の生産や消費にどのような影響を与えたのであろうか。本書で紹介されている蔵屋敷と結託した役人や藩当局と密着した商人の存在は、ここで扱われている市場経済が近代社会における市場経済とは違ったものであることを示しているように思われる。また、契約の履行を保証した株仲間は公権力から与えられた特権をもとに機能する組織である。こうした近世社会に特徴的なものと市場経済の原理との関係について著者はどのように考えているのだろうか。著者が今後こうした素朴な疑問にも答えてくれることを願わずにいられない。

ともあれ、本書のような厳密な検証作業の存在は、なによりも私ども学問研究に携わる者への光明であり、はげましである。著者の今後の活躍をせつに祈りたい。

以上、徳永会員と高槻会員の書物を学会賞に選んだことを、ご報告申し上げます。

2014年10月18日

政治経済学・経済史学会学会賞選考委員会 委員長 森 建資  
加納啓良  
伊藤正直  
岡田知弘  
小林 純